

ラオスで暮らして*

鈴木 玲 子**

I はじめに

私は1993年から1995年の2年間、ラオス人民民主共和国に留学する機会を得た。1年目は、首都ヴィエンチャン市内にあるラオス人家庭の一員として暮らしながら、ヴィエンチャン師範大学の文学—言語学学科に通った。2年目は、ラオス語方言の状況の大体を調べるために全国を廻った。

ここでは、2年間のラオス滞在を支えたラオスの家族とヴィエンチャン師範大学のこと、そして全国を廻ってラオス語について考えたことを述べることにする。地方の行く先々で、「ああ、こんな人と出会えた」「こんなもの食べた」という驚きと喜びは尽きることにはなかったが、やはりヴィエンチャンに戻り、ラオスの家族のわが家へ帰る喜びが2年間の私を支えていたと言っても過言ではない。

II ラオスの家族

1. 出会い

ヴィエンチャンの空港に降り立ち、出迎えのステイさんに連れられてピラーティウォン家へ向かった。ステイさんは外交官で、訪日されたときにラオス人家庭のホームステイをお願いしたところ、「日本のように便利ではないけれど、それでもい

いのなら、私の実家へ住みなさい」と二つ返事で承知して下さった。書類を作る手間が省ける魅力と、ごく普通の家庭だというその言葉に引かれて、ラオスの家庭に住めることがただ嬉しかった。年代を感じさせる木造のその家は、表はフランス風、裏はラオス風の高床式だ。台所は青空の下、トイレなどの水廻りは別棟というつくりで、裏には自然の畑と椰子の木がある。同じ屋根の下に3世帯が住むというラオ族の家族であった。私は一目で気に入った。ソムワン姉さんは私に「住むことができる?」と尋ねたが、その前に私の心は決まっていた。そしてその日からこの家が私にとってラオスのわが家となり私の家族となったのである。

その日、ソムワン姉さんは近所に「私の妹」と一軒一軒私を紹介した後、ラオス女性がはく「シン」という巻きスカートを作りに連れて行ってくれた。ソムワン姉さんの家は、ここに長く住む旧家なので、近所のほとんどが親戚同士だ。夕方、出来上がったシンをはいて、一族の長老の家へ挨拶に行った。おじいさんは「今日からピーノーンカン（親戚同士）だからね」と言いながら、手首に互いの絆と魂を強くする聖糸を結んでくれた。その後、家の玄関の階段手前にある祠に「今日から私もこのピーノーンです。私とこの一族をどうかお守り下さい」と挨拶するように言われた。手を合わせ終わった私に「これで本当のピーノーンカン」と言ったソムワン姉さんの笑顔を私は忘れない。

2. 名前と役割

わが家は、子供が9人、大人が7人の家族構成だったが、皆が血縁関係があるわけではない。けれども「ピーノーンカン（親戚同士）」と認め合った以上、一つの「家」の中でそれぞれがそれなりの役割を担い、お互いに助け合って生きている。そして呼称も社会的地位や家での役割、年齢に応じて決められる。私の場合、「姉さん」と呼ばれたり、「若おばさ

* ラオスの家族について、一部「ユネスコ・アジア文化ニュース、第279号」と重複していることをおことわりしておく。

ラオス国立大学については、1996年12月、ボーセーンカム・ウォンダーラー学長に筆者が行ったインタビューと現在JICA専門家として工学建築学部で教鞭をとっておられる池田進先生より御提供いただいた資料よりまとめた。記して感謝申し上げます。

** Reiko Suzuki, 東京外国語大学; Tokyo University of Foreign Studies, 4-51-21 Nishigahara, Kita-ku, Tokyo 114, Japan



写真1 家族で子供の誕生パーティーをする



写真2 家の厄払い

ん」と呼ばれたり、しばらく呼称が揺れたが、学生で独身だったこともあり、結局「レイコ姉さん」に落ちついた。そして食事の手伝いと食後の皿洗い、5歳のニノの世話が私の役目となった。

ラオス人は本名の他に「小さい名」という呼び名がある。学校や職場以外では皆、この呼び名と親族名称を組み合わせて呼ぶ。例えば、「ベー姉さん」や「エー叔母さん」という具合であるが、ここで注意しなければならないのはこの場合の二人の年齢差と呼称は、必ずしも一致しないということである。「ベー姉さん」は49歳、「エー叔母さん」は35歳。即ち「姉さん」と呼ばれている方が「叔母さん」よりも年上なのである。これは、本人とその家の中で一番関係の強い人とが基準となって親族名称が決まるからである。「ベー姉さん」は、ソムワンさん（42歳）の従姉妹（ソムワンさんのお母さんのお姉さんの子供）に当たり、子供の頃からソムワンさんと一緒に暮らしてきたので、ソムワンさんから見た「〇〇姉さん」となる。「エー叔母さん」は、その「ベー姉さ

ん」の弟の嫁であるので、ソムワンさんもベー姉さんも本来「エー（年下に対しては親族名称を使わず、呼び名のみの方がより親密度が増す）」と呼ぶべきである。しかし、エー叔母さんは、いわばあとからこの家に入ってきた人であり、ソムワンさんやベー姉さんとは、子供を介してつながるということや子供達同士の結びつきの方がより強いということから、子供達の立場から見た呼称である「叔母さん」となる。私の場合、ソムワンさんの妹として迎えられたので、ソムワンさんやベー姉さんからは「レイコ」と、子供達からは「レイコ若おばさん」と呼ばれるべきであるが、家庭内での呼称は、ソムワンさんの子供であるニニー、ニノーを基準にみた「レイコ姉さん」に決まった。年齢的にも中途半端で、社会人として独立していない人はそれなりに家庭内での役割も軽く、その家にいる子供達の立場から見た「若め」の呼称に決まることが多い。私の場合、まさにこのケースに当てはまったようである。

3. 食えること

家族との暮らしの中で、よく思い出すのは、食えることに関わる情景だ。ラオス人の主食はもち米である。もち米は腹もちがいいし、力がわくという。もち米にあうのは「チェオ」という辛子味噌で、主材料によって「きのこチェオ」「トマトチェオ」とさまざまな種類がある。このチェオがうまく作れば、嫁に行く資格があるから、とソムワン姉さん達は、私にいろいろなチェオを教えてくれた。日本にはない調味料やハーブ類をたくさん使って時間をかけて作る。ヨーグルトやハム、ソーセージの作り方も覚えた。牛乳の発酵するタイミングや豚の腸を破れないように洗うのは本当に難しく、何度も失敗した。はじめはお湯に付けて毛を抜き、首に切れ目を入れてまず血を抜くという鶏や鳩のしめ方も覚えた。キュウリも切り方がちがうだけで味がちがうことを発見した。ラオスに行く前までは、「雑草」であったものが、ここで暮らして「野菜」に変わったのである。

季節によって食卓に並ぶ野菜も果物も見事に異なった。ラオスの市場は季節感にあふれている。スイカの季節にはパラシュートテントの傘が開き、3メートルぐらいのスイカの山が市場のあちらこちら

にできる。じゃが芋も一律にピンポン玉から手のひら大へと季節を追って大きさが変わった。竹の子の時期には、竹の子のスープ、竹の子のたたき、竹の子のチューオと、竹の子づくし。台所に立っていないと知らなかった単語は勿論、スイカやじゃが芋の選び方など、「生活の知恵」を随分と教わった。今、心から感謝している。

Ⅲ ラオス国立大学

教育省は大学の組織見直しを行い、私が通っていたヴィエンチャン師範大学を母体に、1996年10月から「ラオス国立大学」という総合大学を設立した。現在のところ、旧カリキュラムの学生が大半を占めていることもあり、授業の体制は殆ど変わっていないようだ。ここでは私が通った「ヴィエンチャン師範大学」と言っていた頃の様子と新編成された「ラオス国立大学」のしくみを述べる。

1. ヴィエンチャン師範大学

ヴィエンチャン師範大学は、当時、唯一の文系大学で、ドンドークという地名にあることにちなんで「ドンドーク大学」という名前で親しまれていた。主として高校、及び師範大学の教員になるための4年制の大学であった。1977年、「ヴィエンサイ師範大学」（ホアパン県）と「ヴィエンチャン高等教育学院」（ヴィエンチャン特別区）が統合されて、現在のメインキャンパスでもあるドンドークに「ヴィエンチャン師範大学」が設立されたのである。

ドンドークは、ヴィエンチャン市街地より北へ九

キロ行ったところにあり、周辺には大学以外大きな木々があるだけで特に何もない。大学も広く、正門から私の所属した文学—言語学学科の校舎まで歩いて13分かかる。大学構内の大木の木陰には水牛やヤギ、そして教員寮や学生寮、病院、託児所、幼稚園、海外留学準備学校などがある。大学へは市内のバスターミナルから三通りの行き方がある。学生がよく利用するのは、そのうちの二路線で、ドンドーク行きのバスが1時間半に1本、ポーントン行きのバスが30分に1本出る。いずれも終点が大学で、片道約30分で行く。値段は150キープ（1996年時点で約16円）。学生の大半は地方から選抜されてきており、大学構内にある寮に入っているの、バスの利用者は少ないが、それでも始業時刻にあわせた朝7時のバスは満杯である。

ラオスの新年度は9月である。9月から1月中旬までを前期、約2週間の中休みの後、2月から6月中旬までが後期となる。4年生の後期は、各自指定された村の高校へ行って教育実習を行う。試験が期末ごとにあり、6月下旬に進級が発表される。その後8月一杯まで休みである。この約2カ月半の休みは、農耕期ということもあり、学生は皆帰省するので大学構内は閑散とする。授業は7時半から1コマ50分授業を2コマもしくは3コマ連続して行う。途中5分もしくは10分の休憩時間があり、12時前には終わる。寮にいる学生のうち、各県より成績優秀で選抜されてきた者は寮費は免除され、月々文房具代、制服代などを含めて約7,500キープ（1995年時点で約1,000円）の生活費・学費がもらえる。制服は、男性は白いワイシャツと黒や紺系統のズボン、女性は白いワイシャツと黒や紺系統のシン（巻きスカート）で、皆、左袖に大学の校章を縫いつける。男女の比率は2：1で、男子学生の方が多い。女学生は、シンの裾の刺繍と長い髪を束ねるリボンのヴァリエーションでおしゃれを楽しむ。

授業は、先生の読んだり書いたりする内容をひたすらノートに書きとっていくことが殆どで、教科書はない。私は「言語学」「ラオス文字の歴史」「ラオス語文法」「ラオスの民話」「ランサン時代の文学」「ラオスの伝統と習慣」を聴講した。本学科には外国人研究生としては、私の他にこの年は中国人が二人、オーストラリア人が二人いた。学年末にはラオス語



写真3 ヴィエンチャン師範大学正門



写真4 制服姿の女子学生たち

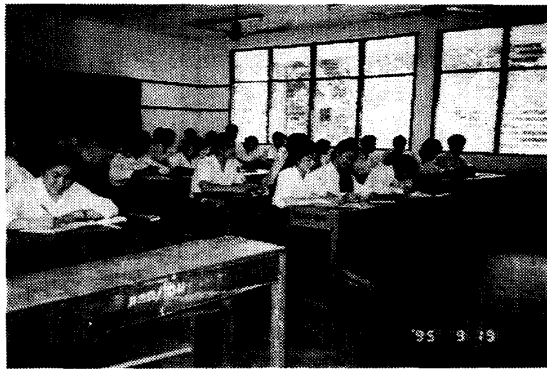


写真5 ヱィエンチャン師範大学の授業風景

で「ラオス語文法」「ラオス語表現法」「ラオス文学」「ラオス文化」についてのレポートを提出しなければならなかった。

文学一言語学学科には、この他に外国人留学生のためのラオス語コースというカリキュラムがあり、1年間初歩からラオス語を学ぶことができる。月曜日から土曜日までの午前中、同学科の先生が交代で教える。ベトナムからの交換留学生が大半を占めていた。また、相談に応じて時間と期間を設定した個別指導コースも可能である。

2. ラオス国立大学

1996年の10月より、表1に示す10の高等教育機関が全て教育省の大学局の管轄となり、「ラオス国立大学」という総合大学に改編された。実際には、諸高等教育機関は表2に示す学部として再編成されたわけであるが、いずれも場所は従来通りの所にある。

上記の学部の他に、ドンドークキャンパスに「中

表1

1. ヱィエンチャン師範大学	教育省
2. 工科大学	教育省
3. 医科大学	保健省
4. 電気—電子高等専門学校	教育省
5. 通信運輸高等専門学校	通信運輸建設省
6. 建築高等専門学校	通信運輸建設省
7. タートトーン灌漑高等専門学校	農業森林省
8. ドンドーク森林高等専門学校	農業森林省
9. ナーボン農業高等専門学校	農業森林省
10. 農業(大学設立準備)センター	教育省

表2

新学部名	旧学科、学校名	場 所
自然科学部	数学物理学科、 ヱィエンチャン師範大学	ドンドーク
	生物化学学科、同上	同上
教育学部	心理—教育学科、同上	同上
人文社会科学部	外国語学科、同上	同上
	地理歴史学科、同上	同上
	文学言語学学科、同上	同上
経済経営学部	(新設)	同上
工学建築学部	12月2日工科大学	ソーバルアン
	電気—電子高等専門学校	同上
	通信運輸高等専門学校	同上
	建築高等専門学校	13号線北5キロ
	タートトーン灌漑高等専門学校	タートトーン
農業森林学部	ドンドーク森林高等専門学校	ドンドーク
	ナーボン農業高等専門学校	ナーボン35キロ
医学部	医科大学	ピアワット

央図書館」「農業センター」「教養課程」がある。また「法律政治学部」を新設する計画がある。

学生は、まずメインキャンパスであるドンドークで、文系もしくは理系の2年間の教養課程を就学する。その後、3年間(医学部は4年間)を専門課程としてそれぞれのキャンパスで学ぶ。ドンドークキャンパス内にあった、もと海外留学準備学校はこの教養課程の中に編成された。入学選抜方法は、(1)ドンドークの教養課程に入るだけの高卒の学力を有するか、各県で選考を行う(2)主要都市で、全国共通の入学選抜試験を行う、の二通りがあり、1996-1997年度の入学人数は、6,724人である。(1)の方法で入学した学生は、授業料、寮費ともに免除され、生活費・学費が支給される。一方、(2)の方法で入学した学生は、授業料、寮費(寮に入る場合のみ)の両方を払うことが義務付けられる。各キャンパスには、去年までの旧カリキュラムの学生が殆どであるという

ことから、先にも述べたように授業体制はあまり変わっていない。しかし学生数が増え、一方で教員数は減っていることから、教養課程では午前と午後に分けた2部体制で授業を行っている。人文社会科学部についていえば、専門課程は「歴史」「地理」「ラオス文学—国語」「外国語（英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語）」の専攻に分かれる予定である。これらはいずれも旧学科を引き継ぐものである。

IV ラオス語について

「ラオス語」という言語名は、むしろ言語学的には「ラオ語」、あるいは現地語の発音 /pháasǎa láaw/ (/pháasǎa/ は「言語」、/láaw/ は「ラオス」の意味)にあわせて「ラーオ語」という呼び方がいいのかもしれない。しかし、東北タイなどで話されているラオ語と相異点も少なくないので、私はラオス国内で使われているラオ語を東北タイのラオ語と区別する意味で、「ラオス語」と呼ぶことにしている。ラオス語は、同じ南西タイ(Tai)語群に属するタイ語(Thai)と文字も発音も似ており、近年タイ語の流入が激しいので、「ラオス語が無くなってしまうのではないか」とラオス語の将来をあやぶむ声がかかれる。しかし、文字のある言語はそう簡単には消滅しないと考える。まして、ラオス人のラオス語を愛し、タイ語から守ろうとする強い心意気がある限り、ラオス語は存在し続けるであろう。

一口にラオス語と言っても地域差、年齢差が非常に著しく、滞在2年目に全国を廻った際に何を言っているのかさっぱりわからなくて、愕然としたことがあった。そんなとき、その人は決まって「私のは**出身のラオス語」と嬉しそうに言う。そして「私とあの人は生まれた環境がちがうんだから使う言葉がちがうのは当然だよ」「私のは/oo/, でも彼は/ua/だよ」と言語学的分析までしてくれる。その度に人間が自分達の都合で引いた国境線で言語を分けてしまうことの無意味さを感じた。

また、高校生の話すラオス語は、タイ語からの借用語が多い。しかし彼らの意識の中ではそれはもうラオス語なので、ある高校生の女の子(16歳)が彼女の伯母(65歳)に「それはタイ語」と怒られて

「きょとん」としていたことがある。また、年齢が30代後半から50代の人々は、照れくさいときや言いにくいことを言うときにタイ語とわかっていながらわざとその単語を使ったりする。60代の人と10代後半の高校生とでは、使用語彙が完全に異なる場合がある。例えば、「(電化製品)を消す」は高校生は/pít/, 60代の人々は/mǎot/. 母音が異なる場合もある。例えば、「等しい」は高校生は/thawkǎn/, 60代の人々は/thoockǎn/. このような状況を反映してか、新聞などによくラオス語保存に関するコラムが載っている。

このような地域差、年齢差をラオスの人々は当たり前のことのように受けとめ、認め合っている。ラオス語に「標準語」は存在しない。むしろ「標準語」などという考えも先に述べた国境線と同じで、元来不自然なものなのかもしれない。ラオスでは皆、自分の出身地の発音や語彙で話す。時にはラオス人同士でさえ、わからないこともあるという。

よく聞かれる質問に、「ラオス語の話し手は何人いますか?」「ラオスにはいくつの言語が存在しますか?」というのがある。どちらも詳細な研究はまだされておらず、正確な数値をいうことができない。先に述べたようにラオス語は地域差、年齢差が著しい言語であり、それに加えてラオスは多民族国家なので、ラオス語以外の様々な言語が存在する。私は隣村同士で異なる言語が話されている状況に幾度となく遭遇した。このような状況の中で、ラオス語の話し手の数をいうことは困難であるが、ラオス国内にいる人は、マスメディアや学校教育を通じて、一応ラオス語を理解する。そして、異なる言語使用者は媒介言語としてラオス語を使用しているので、人口がラオス語の話し手の数と近いと考えてよさそうである。1995年の統計では人口は459万人である。

一つの単語の意味をきくと、そこからいろいろなラオスが見えた。同じ単語でも、場所や人によって意味が異なっていた。いろいろなところでいろいろな人と出会えば、ラオスが深く大きく広がった。1995年には「正しいラオス語」「標準的なラオス語」を検討していくことを目的に、政府は「ラオス語基準検討委員会」を設置した。ラオスの言語状況は変わるかもしれない。